

## 武藏野日曜集会

こと終わりぬ  
——ヨハネ伝第19章——

小池辰雄

1968年7月21日

キリストのどん底 ユダヤの王ナザレのイエス 十字架上の言葉 「彼らを赦し給え」（第一言）  
 「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」（第二言）「これ汝の母なり、汝の子なり」（第三  
 言）「なんぞ我を棄てたまひし」（第四言） 義は与えられるために棄てられた 「われ渴く」  
 （第五言）「こと終わりぬ」（第六言）「わが靈を汝の御手にゆだぬ」（第七言） 永遠の贖罪を  
 終えた 此岸彼岸これ一如

## 【ヨハネ19】

<sup>1</sup>爰にピラト、イエスをとりて鞭つ。<sup>2</sup>兵卒ども茨にて冠冕をあみ、その首  
 にかむらせ、紫色の上衣をさせ、<sup>3</sup>御許に進みて言う『ユダヤ人の王やすかれ』  
 而して手掌にて打てり。<sup>4</sup>ピラト再び出でて人々にいう『視よ、この人を汝ら  
 に引出す、これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん為なり』<sup>5</sup>爰に  
 イエス茨の冠冕をかむり、紫色の上衣をきて出で給えば、ピラト言う『視よ、  
 この人なり』<sup>6</sup>祭司長・下役どもイエスを見て叫びていう『十字架につけよ、我は彼  
 に罪あるを見ず』<sup>7</sup>ユダヤ人こたう『我らに律法あり、その律法によれば死に  
 当たるべき者なり、彼はおのれを神の子となせり』<sup>8</sup>ピラトこの言をききて増々  
 おそれ、<sup>9</sup>再び官邸に入りてイエスに言う『なんじは何処よりぞ』イエス答を  
 なし給わぬ。<sup>10</sup>ピラト言う『われに語らぬか、我になんじを赦す權威あり、  
 また十字架につくる權威あるを知らぬか』<sup>11</sup>イエス答え給う『なんじ上より  
 賜わらずば、我に対して何の權威もなし。この故に我をなんじに付しし者の  
 罪は更に大いなり』<sup>12</sup>斯においてピラト、イエスを赦さんことを力む。然れ  
 どユダヤ人さげびて言う『なんじ若しこのを赦さば、カイザルの忠臣にあ  
 らず、凡そおのれを王となす者はカイザルに叛くなり』<sup>13</sup>ピラトこれらの言  
 をききてイエスを外にひきゆき、敷石（ヘブル語にてガバタ）という処にて審  
 判の座につく。<sup>14</sup>この日は過越の準備日にて、時は第六時ごろなりき。ピラト、  
 ユダヤ人に言う『視よ、なんじらの王なり』<sup>15</sup>かれら叫びていう『除け、除け、  
 十字架につけよ』ピラトいう『われ汝らの王を十字架につくべけんや』祭司  
 長ら答う『カイザルの他われらに王なし』<sup>16</sup>爰にピラト、イエスを十字架に



釘くぐるために彼らに付わせり。

<sup>17</sup>彼らイエスを受取りたれば、イエス己おのに十字架を負いて髑髏（ヘブル語にてゴルゴタ）という処に出でゆき給う。<sup>18</sup>其処にて彼らイエスを十字架につく。又ほかに二人の者をともに十字架につけ、一人を右に、一人を左に、イエスを真中に置けり。<sup>19</sup>ピラト罪標（すべてふだ）を書きて十字架の上に掲ぐ『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と記（しる）したり。<sup>20</sup>イエスを十字架につけし処は都に近ければ、多くのユダヤ人この標（ふだ）を読む、標（ふだ）はヘブル、ロマ、ギリシャの語（ごとば）にて記（しる）したり。<sup>21</sup>爰にユダヤ人の祭司長らピラトに言う『ユダヤ人の王と記さず、我はユダヤ人の王なりと自称せりと記せ』<sup>22</sup>ピラト答う『わが記したことは記したるままに』

<sup>23</sup>兵卒どもイエスを十字架につけし後、その衣をとりて四つに分け、おの其の一つを得たり。また下衣（したぎ）を取りしが、下衣は縫目なく、上より惣て織りたる物なれば、<sup>24</sup>兵卒ども互にいう『これを裂くな、誰がうるか鬪（くじ）にすべし』これは聖書の成就せん為なり。曰く『かれら互にわが衣をわけ、わが衣を鬪にせり』兵卒ども斯くなしたり。<sup>25</sup>さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。<sup>26</sup>イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの子なり』<sup>27</sup>また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』この時より、その弟子かれを己（おの）が家に接けたり。

<sup>28</sup>この後イエス万（よろず）の事の終りたるを知りて——聖書の全うせられん為に——『われ渴く』と言い給う。<sup>29</sup>ここに酸き葡萄酒の満ちたる器あり、その葡萄酒のふくみたる海綿をヒソップに著けてイエスの口に差附く。<sup>30</sup>イエスその葡萄酒をうけて後いい給う『事畢りぬ』遂に首をたれて靈をわたし給う。

<sup>31</sup>この日は準備日（そなえび）なれば、ユダヤ人、安息日に屍体（しかばね）を十字架のうえに留めおかじとて（殊にこの度の安息日は大なる日なるにより）ピラトに、彼ら脛（はぎ）をおりて屍体を取除かんことを請う。<sup>32</sup>ここに兵卒ども來りて、イエスとともに十字架に釘けられたる第一の者と他のものとの脛を折り、<sup>33</sup>而してイエスに來りしに、はや死に給うを見て、その脛をおらず。<sup>34</sup>然るに一人の兵卒、鎗（やり）にてその脅（わき）をつきたれば、直ちに血と水と流れいづ。<sup>35</sup>之を見しもの証（あかし）をなす、その証は真（まこと）なり、彼はその言うことの真なるを知る、これ汝等にも信ぜしめん為なり。<sup>36</sup>此等のことの成りたるは『その骨くだかれず』とある聖句の成就せん為なり。<sup>37</sup>また他に『かれら己（おの）が刺したる者を見るべし』と云える聖句あり。

<sup>38</sup>この後、アリマタヤのヨセフとてユダヤ人を懼れ、密にイエスの弟子た



りし者、イエスの屍体しかばねを引取らんことをピラトに請いたれば、ピラト許せり、乃ち往きてその屍体しかばねを引取る。<sup>39</sup> また曾て夜、御許に來りしニコデモも、没薬・沈香の混和物あわせものを百斤ばかり携えて来る。<sup>40</sup> ここに彼らイエスの屍体をとり、ユダヤ人の葬りの習慣にしたがいて、香料とともに布にて巻けり。<sup>41</sup> イエスの十字架につけられ給いし処に園あり、園の中にいまだ人を葬りしことなき新しき墓あり。<sup>42</sup> ユダヤ人の準備日なれば、この墓の近きままに其処にイエスを納めたり。

### ●キリストのどん底

今日はヨハネ伝19章です。福音を学んで、十字架のところをすつとばすわけには絶対にいかんわけです。今日はキリストのどん底のところです。

<sup>1</sup>爰にピラト、イエスをとりて鞭むちうつ。<sup>2</sup>兵卒いはらども茨いばらにて冠冕かんむりをあみ、その首こぶにかむらせ、紫色うわぎの上衣うわぎをきせ、<sup>3</sup>御許みもとに進みて言う『ユダヤ人の王やすかれ』これは非常に侮蔑てのひらしたところの言葉です。

而して手掌てのひらにて打てり。<sup>4</sup>ピラト再び出でて人々にいう『視よ、この人を汝らに引出す、これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん為なり』<sup>5</sup>爰にイエス茨の冠冕をかむり、紫色の上衣をきて出で給えば、ピラト言う『視よ、この人なり』

ピラトというのはとにかく公正な氣持を持つていたわけです。ローマの代官ですから。<sup>6</sup>祭司長・下役しやくじやうどもイエスを見て叫びていう『十字架につけよ、十字架につけよ』。ピラト言う『なんじら自らとりて十字架につけよ、我は彼に罪あるを見ず』この「見ず」というのは、「見出さない」という意味です。

<sup>7</sup>ユダヤ人こたう『我らに律法あり、その律法によれば死に当たるべき者なり、彼はおのれを神の子となせり』

自分で「神の子」と言つた。これは冒瀆ぼうぜきだと。

<sup>8</sup>ピラトこの言をききて増々おそれ、<sup>9</sup>再び官邸に入りてイエスに言う『なんじは何処いざこよりぞ』

「天から來たか、地から來たか」というわけです。

イエス答をなし給わず。<sup>10</sup>ピラト言う『われに語らぬか、我になんじを赦す權威けん威あり、また十字架につくる權威あるを知らぬか』<sup>11</sup>イエス答え給う

「權威」と言われたので、そこでキリストははつきり言われた。

『なんじより賜わらずば、我に対して何の權威もなし。この故に我をなんじに付わたしし者の罪は更に大いなり』

こと「罪」の問題となつたらば、イエスは絶対の權威者です。彼らはこの「罪」のこと



を審く権威は持たない。彼ら自身が罪びとである。本当に罪のことを審く権威を持つのは神だけ。また、神の子キリストだけです。その他に実は、人が人を審く権威はない。ここに地上の政治のまた刑法の非常に限界というものがあります。だから、地上で不当な審判を受けても、天上においては必ず正当な審判に合う。人間の判断とは違つたものです。刑法学者というものは、およそ裁判のことに携わる人々はみなその気持でおられると思いますけれども。非常に森厳なことですから、人が人を裁くということは。心を本当に静めて清めてからないと、できないわけです。

「人を審くな。その汝が審く審判にて審かれるぞ」

と、恐ろしい言葉があります。マタイ伝7章でしたね。だから、神からの権威を受けとつていなければ、審くことはできない。本当に聖靈にあるときには、聖靈にあつて権威を持ちますけれども、しかし、それは人間が決してその権威を寸毫も私するわけにいかん。

<sup>12</sup> 斯においてピラト、イエスを赦さんことを力む。

ピラトはイエスのこの答えに対して、「何を言うか」とは言わない。彼はやはり非常に良心的な人だったとみえまして、努めて赦さんことを求めていた。ローマ人というのは法の民ですから、法に対してはなかなか良心的なものが一面あつたということも、ピラトをみても言えるかと思います。ギリシア人は文化の民、ローマ人は法の民、ユダヤ人は宗教の民と、まあ大雑把に言つて、そんな特色を持つていてるでしょうね。ドイツ人はどちらかというと、意志的な道徳の民。日本人は情的な芸術の民——非常に勘がいいですからね——そのような特色があるかもしれません。しかし、その芸術がまた深く宗教とも連なる面がありますけれども。

### ●ユダヤの王ナザレのイエス

然れどユダヤ人さけびて言う『なんじ若しこの人を赦さば、カイザルの忠臣

にあらず、凡そおのれを王となす者はカイザルに叛くなり』

「王」と言いましても、靈界の王と地上の王と、同じ「王」といつてもまるで次元が違うのに、こういう詭弁を弄する。

「王と言つてはいるからダメじゃないか。これはカイザルに背くことになるから」と。「メシヤ」という言葉もそういう意味でもつて非常に警戒されたわけです。ユダヤ人は地上に王国を建てよう、神政王国を建てようというのが、このメシヤの、ユダヤ人の理想ですから。ところが、このイエスは、

「自分はこの世のものではない

と。ヨハネ伝18章36節で、

<sup>36</sup> イエス答え給う『わが国はこの世のものならず、若し我が国この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付さじと戦いしならん。然れど我が国は此



の世よりのものならず』（ヨハネ18・36）

と。私はそもそも天から來たもので、また天に帰つていく。わが故里は天にある。この世とは違うんだ。靈界の王だと。

「高い所」というような意味ですが、<sup>13</sup>ピラトこれらの言をききてイエスを外にひきゆき、敷石（ヘブル語にてガバタ）

という処にて審判の座につく。<sup>14</sup>この日は過越の準備日にて、時は第六時ごろなりき。

今でいうと、11時から12時です。

ピラト、ユダヤ人に言う『視よ、なんじらの王なり』

一応、彼らの言葉をそのまま使つてしまつた。

<sup>15</sup>かれら叫びていう『除け、除け、十字架につけよ』

「除け、除け、彼を十字架せよ」という言い方になつています。

ピラトいう『われ汝らの王を十字架につくべけんや』祭司長ら答う『カイザルの他われらに王なし』

相変わらず、しかし、ピラトはキリストの弁護人でもあつた。

<sup>16</sup>爰に。ピラト、イエスを十字架に釘ぐるために彼らに付せり。

<sup>17</sup>彼らイエスを受取りたれば、イエス已に十字架を負いて髑髏（されかうべ）（ヘブル語にてゴルゴタ）という処に出でゆき給う。<sup>18</sup>其処にて彼らイエスを十字架につく。

又ほかに二人の者とともに十字架につけ、一人を右に、一人を左に、イエスを真中に置けり。

これはルカ伝に非常に詳しく書いてある。四福音書は、みなこのへんの記事は非常にこと細かに叙してあります。いちいち今日はそれを比較するわけではありません。

<sup>19</sup>ピラト罪標を書いて十字架の上に掲ぐ『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』<sup>しる</sup>と記したり。

ラテン語で、

「イエスス ナツアレーヌス レックス ユダイオールム」

「ユダヤの王ナザレのイエス」

という。これを「I N R I」と、向こうの名画にはよく頭文字だけ書いてあるが、この場合は全部書いてあつたんでしょうね。ギリシア語は、

「イエスース ホ ナタライオス ホ バシレウス トーン ユーダイオーン」

それからヘブライ語で。即ち、ヘブライ、ローマ、ギリシアと、その当時の全世界の代表的な民族の——全世界といつてもヨーロッパを中心とした全世界ですが——そういう罪標<sup>すてふだ</sup>を記した。

イエスを十字架につけし処は都に近ければ、多くのユダヤ人この標<sup>ふだ</sup>を読む、



これはエルサレムの外です。西北の方、城門外です。

標はヘブル、ロマ、ギリシャの語にて記したり。<sup>21</sup>爰にユダヤ人の祭司長らピラトに言う『ユダヤ人の王と記さず、我はユダヤ人の王なりと自称せりと記せ』

そういうことを言つたんだな。

<sup>22</sup>ピラト答う『わが記したることは記したるままに』

「余計なことを言うな」と。

### ●十字架上の言葉

<sup>23</sup>兵卒どもイエスを十字架につけし後、その衣をとりて四つに分け、おの其の一つを得たり。また下衣を取りしが、下衣は縫目なく、上より惣て織りたる物なれば、

天衣無縫といいますが、正にキリストの衣は天衣無縫であつた。サラツと掛けてあつたんでしようね。

<sup>24</sup>兵卒ども互にいう『これを裂くな、誰がうるか闇にすべし』

これは詩篇22篇にそういうことが書いてある。その通りにやつたんです。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

という、あの詩篇ですよ。あの詩篇のところにこれが書いてある。

これは聖書の成就せん為なり。曰く『かれら互にわが衣をわけ、わが衣を闇にせり』兵卒ども斯くなしたり。<sup>25</sup>さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロパの妻マリヤとマグダラのマリヤと立てり。マグダラのマリヤといいうのはどれにも出できます。

<sup>26</sup>イエスその母とその愛する弟子

「愛する弟子」というのはヨハネに決まつてゐる。ヨハネ伝の主人公。

との近く立てるを見て、母に言い給う『おんなよ、視よ、なんじの母なり』

<sup>27</sup>また弟子に言いたもう『視よ、なんじの母なり』

「もう私は向こう側にいくが、これを子とせよ、これを母とせよ」

ということですね。非常に思いやりの深いキリストの言葉です。と同時に、

「私を本当に受けとるものはみな、靈的な親子であり、靈的な兄弟姉妹である」と、私たちは延長してそうみていいわけです。

この時より、その弟子かれを「己」が家に接けたり。

即ち、イエスのお母さんのマリヤを引きとつたというわけです。

<sup>28</sup>この後イエス万の事の終りたるを知りて——聖書の全うせられん為に——『われ渴く』と言ひ給う。



「ディープソー」という字ですが。血が流れましたから、本当に渴く。大変なものです。

<sup>29</sup> ここに酸き葡萄酒の満ちたる器あり、その葡萄酒のふくみたる海綿をヒソ

プに著けてイエスの口に差附く。<sup>30</sup> イエスその葡萄酒をうけて後いい給う『事

畢りぬ』遂に首をたれて靈をわたし給う。

片一方では、「受けない」と書いてありましたが。

### 『事畢りぬ』

と。今日の題が、この「ハル終わりぬ」です。

「ハル終わりぬ」というのは、ギリシア語で「テテレスタイル」と言いまして、「テレオー」とは「終わる」という字です。「テロス」、何々の「終わり」となつたという。

「愛は律法の終わりである」

とか、みんなの「テロス」という。終局、終末、目的、最後の目的。「テレオロギー」「目的論」という。ドイツ語でいうと、

「エス イスト フォルブラッハト」(Es ist vollbracht)

と言いまして、「全うされた」と。英語では、

「イット ハズ ビン フイニシユット」(It has bin finished)

だね。まさにギリシア語の形もその通りです。現在完了の受け身の形です。

### ●「彼らを赦し給え」(第一回)

ところで、十字架のことが出てまいりましたので、十字架の上でキリストが発した七つの言葉がある。その第一として——別に順序はそうはつきりとはしませんけれども——ルカ伝23章34節に、

「<sup>34</sup> 斯くてイエス言い給う『父よ、彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり』」(ルカ23・34)

罪の赦しのことがまず一番先に叫ばれている。

「私を十字架に付けたんだが、彼らはその為すところを知らない。とんでもない」となんだ、本当は。けれども、私は本当は、彼らに付けられたのではない。自分で十字架にかかつた。付けられながら、かかつたんだ。私が自分で棄てたんだ」と。「我棄つる権あり」なんて書いてある。とにかく、その罪の赦しを十字架の上から言われた。

### ●「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」(第一回)

それから、その同じルカ伝に、

「<sup>43</sup> イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』」(ルカ23・43)



とある。片一方の盜賊に向かつて、

「今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」

と。パラダイス、これは救いだね。罪の赦しの次は、今度は救済の現実だ。パラダイスへの救い。ルカ伝23章43節、非常に私は好きな言葉です。

「われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし」

「もう何もかも問題でないという、完全にキリストの十字架に降参し、また本当にそこに抱かれる」

という、経験を持たなかつたらば、これは「聖靈」なんて言つたつて、それはダメです、そんな浮わついた聖靈は。宗教は、靈的な現象はいろいろありますよ。ちょっと聖靈らしいのが、他の宗教でも。けれども、福音の世界はこの十字架のどん底の、この十字架の門を——はつきりと、

「もはや一切の問題は問題でない、ただこれのみ」というところを——本当に突き抜けてきた人が、初めて聖靈ということが言える。そうでなかつたらば、聖靈なんて言つたつてダメです。

キリストの十字架の両方に盜賊が十字架されてある。これがよく表している。こつちのやつは、

「お前は神の子なら、ひとつ俺たちも一緒に救つてくれないか。この所で奇跡を顕してもらおう」

と、傲慢なわけです。終わりまで傲慢で、これはもう地獄へ行くよりか仕方がない。他に途なし。もう片一方は、

「私は本当に悪いことをして、もうマイナス<sup>99.9</sup>の生活をしてきました。もうどうにもなりません。当然、私は十字架に付けられて仕方がありません。せめても、天国にいらっしゃいますときに覚えてください」

と。忘却の淵に陥つてしまつたのではどうにもならない。せめても覚えていただきたいと。これは心碎けました。キリストの前に降参して、心が碎けた。この碎けの心。キリストは、そういう全身的に、全靈・全心・全身的に——靈と心と身だからだ——自分を投げ出した人は、文句なしに無条件に取り入れる。ザアカイであろうと、マグダラのマリヤであろうと、何であろうと。とにかく、そういうのは全部取り入れて、パリサイ人よりもはるかに先に、本式に天国に行つてしまふ。天国にキリストと一緒に入つたナンバーワンは、十字架の盜賊である。心碎けた盜賊である。これが福音です。これが我々のギリギリの現実を表して

いる。



「そんな野郎がいましたか」

ではない。これが私なんだ、この野郎が。だから、もし私が死んだら、

「今日汝は我と共にパラダイスにあるべし」

と書いておいてもらおう。約束しておきます。

そういう、キリストと一緒にまず第一に天界に入つて行つたのがこの救われた盜賊です。ここに万人救済の現実が表れている。内村鑑三先生が、万人救済のことを言われた。あのいわゆる「戦場ヶ原の語らい」という、あれは僕は大好きなんだ。

「私の如き者がこの十字架の救いにあづかつたのだから、万人は必ず救済されるという確信がある」

と。

「いやあ、内村先生というあんな立派な人がそう言つたんだけれども、他の人はそういうはいかん」

と、まあ普通そう思うでしようね。いや、内村鑑三よりももうひとつ次元の凄いパウロがそう言つた。

「ああ、我れ悩める人なるかな、この死のからだから、現実にこの死のからだから私を救つてくれるのは誰であるか。イエスの他にない。自分は罪びとの首かしらである」

と、パウロが言いました。あの驚くべき構造を持つてゐる福音の大黒柱を建てたようなパウロがそう言つた。今の青年が忘れてゐる、ただひとつのこととはこういう事態なんです。

私は秋に大学祭で一席やります。私は「平和とは何か」という題で語る。そうすると、何か大いに政治問題、平和問題を語るかと思うが、どつこいそうはいかん。まあそのときに見ておいてください、何を言つたか。ただこの一事を忘れたということをはつきりと青年に言わなければならぬ。

●「汝の母なり、汝の子なり」（第三三言）

それから、三番めは、このヨハネ伝19章の、

「おんなよ、視よ、なんじの子なり。また、視よ、なんじの母なり」（ヨハネ

19・26）

という言葉。

「世界はらから、同胞、全部これは神さまの大家族であるぞ」

と。究極のところは、何人種であろうと、どこと人であろうと、ソ連であろうと、中共であろうと、どこであろうと、全部これは神の大家族であるというのが、神の究極の本願である。現実は何とそれと離れたことであるか。何もキリストはそんな大袈裟なことは仰らない。

「これ汝の母なり、汝の子なり」



と。問題は、解決は、手近なところから、身近なところから。本当に出会う隣人を愛することなくして、世界の平和の何のと、何のことかと。もはや、ある意味において、私たちは今の行き詰まりの世の中には、預言者的な課題を担わせられているわけです。もう既にとき遅しというようなわけでしようけれども。しかし、仕方がない。遅いということは、神の国においてはひとつもない。

この三番めの、親子・兄弟姉妹、大家族。本当にそれだけの突き抜けをするためには、ただ思われているくらいのことではダメなわけです。まあ、だんだん行きましょう。

### ●「なんぞ我を棄てたまいし」（第四言）

それから四番めは、

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

これは詩篇22篇の第1節の言葉です。義として生きたイエス、義人はただ一人イエス。それは天界にいきなりサーツとのぼるはずだった。それが棄てられた。

「あなたは自分で義をふみやぶりましたか」というわけだな、

「なんぞ我を棄てたまいし」

とは。これは全世界の罪に対するところの戦いの言葉だよな。徹底的な赦しがあるかと思えば、徹底的な戦いがある。もの凄い矛盾構造です、十字架そのものが。クロスしているんだから。聖書は偉大な調和の書であると同時に、深刻きわまりなき矛盾の書です。また、神さまの方からいうと——人間は罪を犯したし、犯すし、犯すであろうから——全部これは滅びにいくに決まっているんだ。

「我々は罪に閉じ込められている」とパウロが言つているとおり。自分でもつてこの罪から脱出することはできない。

「宗教」なんていいましても、これはおかしなことですよ。いわゆる阿片的な宗教もあるでしょう。けれども、この人間の罪の問題は、一切の世界の不合理、矛盾、不公平、さまざまのことを行わされているのは、みんなこれは人間の罪が錯綜して醸しだしているところの現実だから。万人は救済を要するようになってきている。それなのに、

「宗教は、まあそいつはちょっと後回しだ

なんてやつてている。あなた方の中から文部大臣でも出てきてね、はつきりとそれだけのことを言うような青年が出てこなくては。私はもう情けなくなるよな、正直。

今日は、新しい人たちに来てもらいたかつたんだよね。大事なところを話していけるのにさ。福音より大事なことがあるんでしようかね、一体。日曜は万難を排して、お金がなかつたら一里でも二里でも歩いて来るだけの魂にならなかつたら、本当の意味において靈的人物



にはなれですよ。今は、言葉の一番深い意味における靈の人物を必要としている。心靈的という意味ではない。キリストの靈を持った人。ただ「信仰」なんて言つてゐるのでないですよ。

### ● 義は与えられるために棄てられた

ローマ書3章21節から、

「<sup>21</sup>然るに今や律法の外に神の義は顯れたり、

福音に神の義が顯れた。

これ律法と預言者とに由りて証せられ、<sup>22</sup>イエス・キリストを信ずるに由りて

イエス・キリストを受けいれることによつて、

凡て信する者に与えたもう神の義なり。

律法の義は自分で守らなければならぬ義であつた。ところが、

「キリストを受けとる者に神さまが与えてくれるところの神の義が顯れた」

というんだな。

之には何等の差別あることなし。

もう全然、差別がない。相手がどうであろうと、これは無条件に与えられる。

<sup>23</sup>凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず、<sup>24</sup>功なくして神の恩恵により、

もつぱら神の恵みによる。

キリスト・イエスにある贖罪<sup>あがない</sup>によりて義とせられるるなり。

今、キリストが主張している義はそれではないですよ、今は神の義。

<sup>25</sup>即ち、神は忍耐をもて過來<sup>すがき</sup>しかたの罪を見逃し給いしが、己の義を顯さん

とて、キリストを立て、その血によりて信仰によれる

罪を除去するところの、

宥めの供物<sup>そなえもの</sup>となし給えり。<sup>26</sup>これ今おのれの義を顯して、自ら義たらん為、

またイエスを信ずる者を義とし給わん為なり。」（ロマ3・21～26）

この26節が非常に大事な言葉です。

「神はおのれの義を顯して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義とし給わん為である」

と。キリストは義人であつた。その義は棄てられた。何のためにこの義が棄てられたか。

この義は与えられるために棄てられたんです。だから、

「なんぞ我を棄てたまいし」

という言葉は、



「あなたはこの義を人に与えようとして、お棄てになつたんだ」と。その反語がそこに響いてくるわけです。キリストは義人であるから、スーツと天界に神の許に行つてしまつたら、キリストの義はどうしましようか、誰に与えましようか。与えるわけにいかない。

「私のように義人となれ。私のまねをしろ。『キリストにならいて』とやれ」と。

そうしたら、また律法の世界に入つてしまふ。どうにもならん。誰にもそのまねができない。キリストの真似が誰もできない。「イミタチオ・クリスティ」（キリストにならいて）なんていつたつて、本当の意味ではできやしない。だから、

「その義は私がもらつたぞ、そして、人にやる」

と。そのことはゲッセマネの祈りでもつて彼は既に受けとつてているんです。彼はゲッセマネの祈りで既にそれを受けとつていますけれども、もう一遍、十字架上で、

「この神の義が棄てられるんだ、そして与えられるんだぞ」

と、もう一遍、逆説的な表現をキリストはせざるをえない。ええ。いかに罪ということが深刻なものであるかを、この義の叫びによつてもう一遍キリストは逆に罪の事態を指摘したわけです。人間の罪はなんとひどいものか。私を棄てるまでに、この義を棄てるまでに、この罪はどうにもならないものであると。それで、この義を、贖罪の、罪の赦し、この贖罪。

「彼らを赦したまえ」

という、この罪の赦しが、罪の赦しとしてこの義が今度は、全面的に与えられるように使われる。だから、

「律法の義の他に、福音のうちに神の義が顕れる」

という。キリストという喜びの音信は、何が喜びの音信か。その内容は、「義を与える」ということである。義を与えることは同時に神の無限の愛である。

なにか「可愛がる」というような愛ではないですよ、この愛は。おそろしい愛ですよ。「義を与える」ということが即ち、アガペーなんです。そこが仏教的な大慈大悲とは大いに性格が違う。福音の世界は筋金が通つてゐる。そこはぼかしてはいかん。私はもちろん仏教を非常にいろいろな意味において評価します。けれども、ちゃんともうずつと立つものが立つてゐる。この縦のもの凄い柱と、横のもの凄い広がり。

「神の恵みはいと高し、いと深し、いと広し」

というのがそれです。

だから、義という言葉は、私たちにはもう今度は恐ろしい言葉ではなくて、非常にうれしい恵みと同じことなんです。義と恵みは一つなりと。「与える義」だから、審く義ではなくつた。しかし、そのことは贖罪という事態をはつきりと顕すことが、「神の義が顕れた」ということ。

「神はおのれ自ら義たらんが為」



とはそのことです。「おのれ自ら義たらんが為」というのは、罪を勝手にいい加減に赦すのではない。はつきりとその代償をとる。即ち、贖罪という代価を、無限の代価を神さまは受けとつて、これが義を与え、罪に対する審判がキリストにおいて全部一身にしょわれたわけだ。十字架でもつてキリストは審判を全部しょつて、

「お前の罪は全部私が引き受けたぞ」

と。私たちの罪、この「我という罪」は、

「罪は完全に私は引き受けた」

と、キリストが。マルチン・ルターが宗教改革をするその要は正にこの一事だつたんです。そういう要の事態をルターが本当に受けとつたから、おのずから——ルターは宗教改革をしようなんて思つていやしない——おのずから宗教改革になつてしまつた。必然の結果です。やむにやまれずしてそうなつた。だいたい、本当に生きている人はみんなその「やむにやまれない」姿です。ロダンというやつでも。それで、はつきりしましたね、この義というのが。

### ●「われ渴く」（第五言）

それから今度は、さつきのヨハネ伝19章28節の、

「われ渴く」

という言葉。

「さいわいなるかな、義に飢え渴くもの、その人は飽くことをえん」

という。しかし、キリストは血を流しました。血が流れた喉の渴きなんてものは、これは本当にそういった土壇場でつくわした人でなければわからない。これはなにさま、釘付けにされてしまつたんだから。

### ●「「J」と終わりぬ」（第六言）

そして、六番目が、

「こと終わりぬ」

という言葉です。

### ●「わが靈を汝の御手にゆだぬ」（第七言）

七番目が、ルカ伝23章46節、

「父よ、わが靈を汝の御手にゆだぬ」

と。これは詩篇31篇5節から来ている言葉。キリストの祈りはたくさん詩篇から出てくる。

「われ靈魂をなんじの手にゆだぬ。エホバまことの神よ、なんじはわれを贖いたまえり」（詩篇31・5）



「あなたが私を贖つてくださいた。主さま、みなお委ねいたします」

これが私たちの地上を去るとその告白でもありますね。何一つとして自分の力でできたものなんか一つもない。みんな主の力による。

その七つの言葉という。十字架上の七語とはやういうわけです。

### ●永遠の贖罪を終えた

それで今日は、その六番目の

「い」と終わりぬ

です。何が終わつてしまつたのか。もちろん、私が言ふまでもなく、いの「い」とは第一番先の、贖罪のこと、贖罪の大業、罪を贖つたその大業がいとで終わつた。これはヘブル書の9章11節から読みますと、

「然れどキリストは來らんとする善き事の大祭司として來り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる

高次なる、

全き幕屋を経て、<sup>12</sup>山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、

十字架という至聖所に入つて、

永遠の贖罪を終えたまえり。<sup>12</sup>」（ヘブル9・11～12）

これが正に「い」と終わりぬです。

「永遠の贖罪を終わつた」

と。永遠の贖罪を終わつた。歴史がどのくらい続いとが、ただ一つの別ないとがあつた。そのいとはいのキリストの十字架という事実で、いの事実が永遠の贖いを終えた、終わらしめたといふの事実である。

私たちは既に解決済みの人間です。

「まだ問題がある、問題がある」

と、問題ばかり考えているね。問題はないんです、ひとつめ。いろんな問題はみんなそれは第一義的な問題です、すべて。第一義的な問題は解決しているのに、そのいとを忘れたり、いい加減にしたりしているのが今的一般の現実ですよね。ただ一回終わつた、それを本当に受けとつたらば、その次に今度は続いてくるといろの無限の事柄がある。まあそれはこの次にお話する」とにしましよう。

ゲーテの『ファウスト』の一番終わりの方にいいう言葉があつた。第一部の終わり。

私はいれを『永遠の女性』という論文の中になよつと書いておいた。「神秘の合唱」(12104～12111行)といつといふ。

「廻るはくむのはなべて映像にすぎず、



満ち足らざりしものここに円現し、  
名状しがたきものここに成就せり。

この言葉です、「こと終わり」 ということは、ここに成されたという。

永遠の女性われらを引き上ぐ。」

と。どこへ引き上げるかということは、私が一行それに付け加えたといつか言つたですね。

「愛と喜びひとをもつて

聖なる太陽へ」

と。これはゲーテが書いたのではない。これは私がゲーテのあとに付けた。ゲーテはこの『ファウスト』を「太陽」という言葉で始めているから、「太陽」という言葉で終えてやろうと思つてね。「聖なる太陽」とは神さまのことです。神聖な太陽へと連れて行く。男はダメだから、女が神さまへと連れて行くという、ゲーテさんらしい言葉です。もつとも、そこを歌わないところがいいんでしょうけれどもね、私みたいにはつきり言つてしまふのではなくて。けれども、東洋にちょっと不思議なやつがいると、天界でゲーテは思つているかもしない。

「そうだ。ゾンネで終わつて、それはありがとう」  
なんて言つてゐるかもしねれない。

### ●此岸彼岸これ一如

なぜ、私が今こんな句をそこに引っ張りだしたかといいますと、このゲーテが歌つているのは天界の話です。地上ではどうしてもダメなんだ。

「地上の一切の諸行無常、過ぎ行くものは真理の映像に、影に過ぎない。比喩的なものだ。どうしてもこの地上では満ち足らない。届かない。そういうものはこの天上では円現する、事実となる」

と。それから、筆紙に尽くしがたきものがある。いかなる彫刻家も、いかなる画家も、いかなる詩人も、どうしても筆を折らざるをえない境地がある。ダンテも「天国篇」でそう書いてゐる、

「もうこれ以上書けない」と。ミケランジェロも鑿のみを一番終わりには放つてしまつてゐる。未完成に終わつてゐる。

ロダンなんかにもそういうのがあるね。そういうわけで、

「実は地上では未完成の形が本もので、完成したような形はうそだぞ」  
なんてなことで本当はありましょうね。

「日本の詩」なんていう詩の全集が出ても、藤井武の詩が出てこない。こんな偉大な詩が、盲点があつて見えない。いかに日本人というのは本当の宗教の世界に対して盲目であるかということがそれでもわかる。いわゆる詩人なんてはダメですよ。



そういう名状しがたきものがここでは成されている。ところが、その  
「ここに、ここに」

とゲーテが天上のことを歌つてゐるその「ここに」が、こつちからいうと、**彼岸**をキリストは常に**此岸**として動いていたひとである。

「御意の天に成る」とく地にも成らせたまえ

と言つて、成らしめていたのがキリストである。これが本当の信の現実なんです。私が、

「信は即ち現である」

と言うのはそのことです。我々はゲーテの最後の境地を実は現実につかんでいる人なんです、本当の信仰の人は。

「ああ、ゲーテは深淵な高遠なことを言つてゐるな」

と言つて、ただ眺めているんだ、普通の人たちは。

「いやいや、それはこつち側に来ておりますよ」

ということは、私たちは言える。まあ大詩人とか何とかいいましても、大したことはない。なにも偉がる必要はないけれども。なるほど詩はえらいよ。ちょっとゲーテみたいな詩は何年たつたつて書けませんよ、こんな凄いのは。それは人々は、天才あり、凡人あり、賜物あり。もう人間というのは大体、生まれつき決まつてゐるんだよな。ナスの枝にはキュウリは成らない。私に絵を書けと言つたつてダメなんだ。ただ、ある程度の素質があれば、それは今度は努力でもつて、あるところまで行くというのはおおいにいろいろなケースはありますよ。けれども、全然欠けたようなものをやろうということはご苦労さんな話で、決してそれは神さまの御意に沿つたことではない。そんな努力は、それはとんでもない余計な努力だ。

「お前の天職はこつちにあるんだ、大学なんかに入らなくていいんだ」と。あの吉川英治なんてそうですよ、小学校しか出ていない。何でも大学に入らなくてはなんて思つたら大間違いだ。

昔、私は「**彼岸**」という号を書いてみた。それはある意味において**彼岸**なんだけれどもさ、それは私の**彼岸**であるなんてなわけで。けれども、信仰はどこまでも**此岸**的なものである。こちら岸のことである。思われてゐる世界、望まれてゐる世界ではない。願われてゐる世界ではなくして、現に受けとつてゐる内実の世界です。

だから、皆さんの祈りも、お願ひしていいですよ、もちろん。お願ひしていいですけれども、

「その願いは聴き届けられている」

という確信をいただきながらの願いでなくてはいかん。

「多分、そうなるかな。どうだろう。願つてみたけれども」

なんて、そんのはひとつも願いになつていいない。本当の願いは、今どんなにそれが成就しなからうが、本質的には來てゐるんだと。それで祈りは力である。そこで祈りは神の力



である。祈りは現実である。祈りは即ち、

「こっち側にきている」

ということは、もうひとつ別な言葉でいえば、自分を向こう側に投げ出しているということ。自分を向こう側に投げ出している彼岸が即ち、ここで此岸になつてている。今度はこっち側で彼岸が即ち、此岸になつてしまふ。そして、

「あ、地上が彼岸だつたか」

と上から見ている。逆になる。彼岸と此岸が反対になつてしまふ。

「また戻ろうか」

ではないよ。そうではない。コロサイ書のところにそういうことが書いてある。コロサイ

書3章、

「<sup>1</sup>汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、キリストと共に甦えらせられし以上だよな。

上にあるものを求めよ、キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。<sup>2</sup>汝ら上にあるものを<sup>おも</sup>念い、地に在るもの<sup>おも</sup>を念うな、<sup>3</sup>汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。

即ち、「あちら、あちら」と言つてゐるその中に自分は隠れていふと言つて、

「彼岸にもう来てしまつてゐるぞ」

というようなことを言つてゐるんですよ、こここのところで。

<sup>4</sup>我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らもとともに榮光のうちに現れん。」（コロサイ3:1-4）

というんだから。

「地上にありながら、もう天上の人だよ。天上を此岸としている人だ。単に彼岸ではないぞ

と。此岸彼岸、これ一如という。逆に上りきりではダメですよ、皆さん。今度は、下におりてこなければ。下りてくるというのは、また恋しいから下りてくるのではない。下りてきて、今度はこの此岸の人間を救うために下りてくるんです。これがいわゆる淨土真宗でいうところの「還相回向」とか何とかいうね。天使が上り下りする。そういうのと同じことです。

……（以下録音切れ）

